

法起寺

法起寺は、飛鳥時代（593～710 年）に日本に仏教を広めた政治家である聖徳太子（574-622）によって設立された 7 つの偉大な仏教寺院の 1 つである。息子の山背大兄皇子は、父の死後その遺言によって岡本というところにあった宮殿を寺院とし、708 年に完成した。発掘調査により、この場所に以前に存在した建造物が明らかになり、考古学者は、聖徳太子が法華経を唱えた岡本宮殿であると考えている。

寺は奈良時代（710-794）に栄えたが、その後衰退し、近くの法隆寺の管轄下に入った。法起寺の壮大な三重塔は国宝であり、8 世紀初頭から残っている唯一のオリジナルの建造物である。江戸時代（1603～1867 年）、17 世紀後半に真政圓忍とその弟子が塔を修復し、講堂を建設した。その後、1863 年に聖天堂を追加した。慈悲の菩薩である十一面観音像は、平安時代（794-1185）に彫られ、重要文化財に指定されている。蓮池と庭が美しい法起寺は、静かな自然の中で聖徳太子の仏教への献身を伝え続けている。